コーセー

「雪肌精 SAVE the BLUE」プロジェクトが10年目に突入

コーセーは、自然保護活動の一環として、グローバルブランド「雪肌精」を通じ、キャンペーン期間の売上の一部を沖縄のサンゴ育成活動などに寄付するとともに、海の環境保全と啓発活動に取り組む「SAVE the BLUE」プロジェクトを2009年より行っており、今年で10年目を迎える。

2018年は、日本において、これまで夏期に行っていたサンゴ保全活動に加え、冬期に森林保全活動を行うこととし、青い地球を守るプロジェクトとして進化させていく。海外においては、展開エリアを拡大し、日本を含めた10の国と地域（中国・台湾・香港・韓国・タイ・シンガポール・マレーシア・インドネシア・アメリカ・日本）にて盛り上げていく。

日本では、7月1日～8月31日までを夏のキャンペーン期間として予定している。この間に購入された「雪肌精」シリーズ対象商品の容器の底面積分の合計に相当する面積の環境保全費用を、夏にはサンゴ育成活動費用として寄付する。

また、12月1日～12月31日までを初めての冬のキャンペーン期間として、植林植樹活動への寄付を予定している。

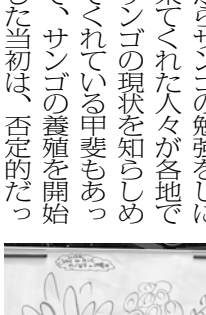
「SAVE the BLUE」プロジェクトでは、沖縄のサンゴ育成活動により過去9年間で累計植え付け本数1万440本（合計8749万1413㎠＝25m公認プールの約23・3倍）のサンゴの森が沖縄の海に広がった。

また、海水温の上昇の影響でサンゴの死滅につながる白化現象が世界各地で発生している中、「SAVE the BLUE」プロジェクトにより植え付けてきたサンゴの中から高水温に耐性を持った品種が誕生し、白化することなく多くの卵が沖縄の海に広がっているなど、サンゴ礁の再生や保全に希望を与え、環境保全に貢献している。

「雪肌精 SAVE the BLUE」2018年サンゴ留学を開催

コーセーは、5月29～30日にかけて、メディア関係者向けに「雪肌精 SAVE the BLUE」プロジェクトが10年もの長きにわたり続いてきた要因について「1つ目は、『CSR活動は最低でも10年続ける覚悟を持ってすべき』と送り出した小林一俊社長の強力な後押しであり、2つ目は、売り手と買い手がともに満足し、社会貢献にもつながる三方よしの精神が貫かれていたことであり、3つ目は、金城夫妻の沖縄の海やサンゴに対する非常に前向きな思いがあったからだ」と述べ、「私自身はこの6月で退任するが、この企画に当初より携わった一員として10年とは言わず、20年、30年とコーセーがある限り続けていって欲しい」と語った。

外尾取締役


吉見氏

金城浩二・美佐江夫妻

続いて、吉見氏が「SAVE the BLUEの歩み」をテーマに、これまでの国内における活動を振り返るとともに、2011年から実施している海外での「SAVE the BLUE」プロジェクトの状況について説明した。

最後に、金城夫妻が沖縄の海やサンゴを取り巻く状況について説明するとともに、今後の取り組みについてビジョンを語った。

金城氏がサンゴの養殖活動をスタートした1998年と小学生だった1970年代とを比べると、海の生き物の数は9割ぐらいまで減ってしまっていたといい、現在はさらに状況が悪化しており、「数%レベルまで落ちてきている。海の中の景色は、サンゴの白化が急速に進んだことで、ハイビジョンからモノクロに変わってしまった」（金城氏）と沖縄の海の現状について説明した。

さんご畑入口

こうした状況の中、金城氏はコーセーとともに9年にわたり取り組んできた「SAVE the BLUE」プロジェクトを通じて、新たに誕生させた白化しないサンゴ「耐性サンゴ」に一筋の光明を見出しているという。

「コーセーのサポートがなかったなら、耐性サンゴが誕生することは難しかったと考えており、海水温の上昇や海の汚染が進む中でサンゴ礁を増やしていくことも困難に直面していただろう。わずかな範囲でもサンゴ礁をつくることができ、今は希望感の方が大きくなっている。また、サンゴ留学という形で日本全国からサンゴの勉強をしに来てくれた人々が各地でサンゴの現状を知らしめてくれている甲斐もあって、サンゴの養殖を開始した当初は、否定的だった世論が次第に『サンゴを植えるべき』というように変わっていき、具体的にアクションを起こそうという動きが増えてきている」（金城氏）

さんご畑

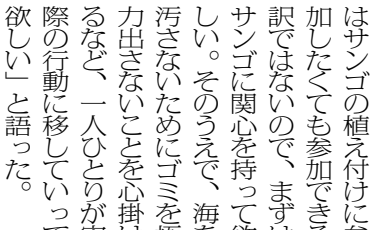
サンゴの養殖活動が継続していくためには、「環境をよくして儲かる会社」になり、そうした会社を純粋に評価する社会が形成されることが重要という。

「残念ながら、サンゴの養殖だけで施設が運営できている状況ではなく、映画出演で講演料が増えたことやコーセーのキャンペーンにより支えられているというのが現状だ。サンゴ畑を教育の場として活用したり、協賛する企業・団体を増やすことなどにより、継続する仕組みをつくっていきたい」（金城氏）

最後に、金城氏は今後の抱負について、「サンゴの養殖を継続していくためには、今できることを楽しみながら実行していくことが重要だ。その時代の環境変化から目をそらさずに行動し続けることに集中していきたい」と語った。

サンゴの株分け

2日目の30日には、金城夫妻が運営する「さんご畑」にて、東京海洋大学名誉博士・客員准教授で、国際サンゴ礁年2018のアンバサダーを務めるさかなクンによる「SAVE the BLUE」マスコミ留学が行われた。


国際サンゴ礁年2018アンバサダーのさかなクン

さかなクンは、美しいサンゴの森を守るために今できることについて問われ、「サンゴ礁は、海洋面積と比較すると非常に規模が小さいが、海の生き物にとってはかけがえのない存在であり、それを守るためには、養殖というものが直接ケアすることにつながる。ただ、日本中の多くの人々はサンゴの植え付けに参加したくても参加できる訳ではないので、まずはサンゴに関心を持って欲しい。そのうえで、海を汚さないためにゴミを極力出さないことを心掛けるなど、一人ひとりが実際の行動に移していって欲しい」と語った。